

Laimonas Briedis

Vilnius: City of Strangers

梶 さやか

本書は、現在リトアニア共和国の首都であり、ヴィリニウスと呼ばれている都市についての研究である。ただし、歴史地理学・文化地理学を専門とする著者ライモナス・ブリエディスは、このまちを訪れた、あるいは長期にわたって滞在した人物が残した記述を軸に本書を組み立てた。そのため本書は典型的な都市史の書物ではなく、このまちを旅した人々の体験やこのまちの表象についての研究であり、旅や旅人、文学、地図といったテーマと密接に結びついている。一方で、著者は本書で用いたこれらの外部の者による記述の一部を原典ではなく、翻訳あるいは他の研究書から利用している。また注の付け方などの特徴からも、この本は学術書としてではなく一般向けの啓蒙書と位置付けた方が良いように思われる。それゆえ「都市」というテーマの特集号にこの本の書評がふさわしいかどうかは分からないが、長らくヨーロッパの周縁に位置し、歴史的には単独の民族、言語、宗教、イデオロギーが圧倒的な支配を確立することがなかったこの都市についての研究を取り上げることにはそれなりの意味があると考ええる。

まずは内容を紹介したい。本書はプロローグと時代順に並んだ八つの章から構成される。

プロローグ「出発」では本書の構想が語られる。本書はこのまちの周縁化された中心性を「敷居」、つまりW・ベンヤミンのいうように境界線でも点でもない、流動的な領域と捉える。そして「敷居」に踏み込んだ旅人という外部の者による記述を利用して、変化するヨーロッパの地理とこのまちの歴史の双方を描く。しかし、一個人の経験や理解が及ばないほど多くの言語や文化、記憶が共存してきたこのまちでは、土地に生まれ育った者も含めて誰もが異邦人となりうる。本書のタイトルにはこうした意味合いも込められている。この点に関連して、本書ではこの都市の名前（ならびに都市内や周辺地域の地名）が史料に現れる形（あるいは語り手の言語）に応じて書き分けられる。リトアニア語のヴィリニウス *Vilnius* のほかに、ロシア語やフランス語のヴィルナ *Vilna*、イディッシュ語のヴィルネ *Vilne*、ドイツ語のヴィルナ *Wien*、ポーランド語のヴィルノ *Wlno* などである。この地名表記の複雑さは巻末の目次を参照することで解消されるはずだが、残念ながら目次は網羅的ではない。だがこの地域の錯綜する歴史をより公平に記すため、本書評でもこの方法に従ってこのまちの名前を表記したい。ただし付言しておけば、本書では地の文で筆者が用いるのはどの時代に関してもヴィリニウスという名称であり、この表記法の原則は貫徹されてはいない。

第一章「ヨーロッパのふち」は、中世から近世初期における、リトアニア大公国の首都ヴィリニウスを西方カトリック世界とのかわりの中で扱う。ヴィリニウスがラテン世界の文献で言及さ

れた最古の例は、一三三三年「リトアニア王」ゲデイミナスが教皇に宛てたキリスト教に改宗する旨の書簡においてである。翌年一月初めにヴィリニユスに着いた使節によると、ゲデイミナスはしかし改宗の意図を否定、リトアニアにおける宗教的な寛容と平等の精神を楯にカトリック信仰を拒絶し、キリスト教世界の不正や暴力、罪を批判した。騎士団や他のカトリック諸国の騎士によるリトアニアへの略奪の「旅」Heimasなどキリスト教徒と非キリスト教徒との区別が厳然とある一方で、使節が残した記録からは、ドミニコ会とフランチェスコ会の対立、ゲデイミナスの改宗に反対する有力異教徒を買収するドイツ騎士団など、キリスト教徒対非キリスト教徒という区分では捉えられない事象も浮かび上がる。リトアニアの公式なキリスト教（カトリック）改宗から一世紀以上を経た一六世紀初頭ヴィリニユスを訪れた教皇特使Z・フェッレリは、当時の君主ジグムント一世の兄で敬虔と禁欲で知られたカジミエシュ（一四八四年没）の列聖に関する調査を行った。ヴィリニユスに所縁のある最初の聖人は東方正教会の信徒三人であったが、カジミエシュの列聖作業はカトリック世界にヴィリニユスを位置づけるものであった。

第二章「サルマチアの地図作り」では、リトアニア大公国がポーランド王国と合同し、「共和国」を構成していたルネサンス期からバロック期にかけてのヴィルノを扱う。「共和国」の貴族たちはルネサンス期に再発見された古典古代のあいまいな地域概念であるサルマチアに自らの起源を見出した。ヨーロッパでは、リトアニアは広大な未開の土地サルマチアとおおむね同一視され、ヴィルノは辺境の混沌として粗野な、エキゾチックな都市として

描かれた。当時の外国人による記述では、サルマチア人（リトアニア人）はしばしば残酷で怠惰、社会の規律や性的モラルの意識が低いと記された。しかし、ヴィルノの辺境性は宗教的寛容や異文化間の相互作用を可能にする強みでもあり、両キリスト教世界をつなぐ外交上の重要性を有してもいた。また、ヨーロッパの辺境たるサルマチアについての地理認識が深まり、ヨーロッパという概念が地図上で具体化されることによって、空間の実体としてのサルマチアの意義が逆に薄れていったという指摘は興味深い。

ヴィルノのバロック時代は一六〇二年のカジミエシュの列聖で幕を開ける。聖カジミエシュ教会（一六〇四年建造開始）を嚆矢にバロック様式の建築が主に貴族によって次々と建てられた。一七、一八世紀は、ロシア（モスクワ）やスウェーデンによるヴィルノ占領を含む諸外国との戦争や疫病、大火など混乱が続いた。また、ルネサンス以来古代ローマの貴族に自らの起源を位置づけてきたリトアニアの大貴族はバロック建築によってローマとのつながりを視覚的に示そうとした。この二点を背景として、ヴィルノでは一八世紀後半になってもなおバロック時代が続いたのであった。またこの時期においても第一章で扱われた時代同様、都市の言語的・宗教的多様性はイエズス会士など一部の住人や多くの外国人によって否定的に受け止められていた。

第三章「啓蒙の暗がり」は、キャプテン・クツクの第二回の航海に同行し、啓蒙の世紀を体現する科学者J・G・A・フォルスターがヴィルノ大学の教官として一七八四―一八七七年にこのまちに滞在した様子を描く。第一次分割を経験した「共和国」は、当時ドイツ人の間では一般に、啓蒙の価値を理解しない、知的・学問

的水準の低い、政治的時代錯誤の国と認識されていた。フォルスターは「共和国」領内のドイツ語系プロテスタントの家庭に生まれたが、その視線は外国人のものである。旅の道中やヴィルナに關する彼の評価や記述はときによって大きく異なる。たとえば、道中の人々の貧困と抑圧状態に衝撃を受けて半自然・半文明の状態と記し、周囲の景観も悲観的に描く一方で、グロドノで開かれていた「共和国」の全国議會の様子を好意的に捉えた。ヴィルナの上流社会の過剰なまでの寛大さと社会的・性的親密さに閉口し、ヴィルナ滞在を嫌悪したかと思うと、静かに研究に打ち込むには最適の場所であると考え、自らをヴィルナへの啓蒙の伝道者と位置づけた。だが、大学とフォルスター相互の過度の期待に起因する行き違いと言語的な孤立から、彼は学問や教育が軽視されているヴィルナは啓蒙に値しないと啓蒙の使命を投げ出し、ロシアによる調査航海に招かれてヴィルナを離れることとなる。

第三次ポーランド分割によってこのまちはロシア帝国に併合された。第四章「ナポレオンの呪い」は、ヴィルノ大学で約二十年間教えたウィーン出身の医師J・フランクによる記述と、一八一二年六月に始まるナポレオンのモスクワ遠征に参加したフランス同盟軍やロシア軍の将兵の記述などからなる。フランクは同市の社交界に溶け込み、物質生活や宗教的慣習、ユダヤ人などについて興味深い記述を残した。ユダヤ人の疾病を人種的な特徴や宗教的・社会的慣習、食習慣によって整理しようとも試みている。

モスクワ遠征に参加したスタンダールやA・コランクールなど、様々な国から来た異なる階層の将兵や外交官、その他民間人による記述は、本書の中でも特に大きく取りあげられている。やや長

くなるが一部を紹介したい。ヴィルナに着くまでに早くも露呈した大陸軍の地理情報の不足や地図の不備。糧食や物資の不足とロシア軍の焦土作戦に起因するとされる大陸軍による過度の徴発や略奪。一方で、それがロシア国内に入る以前から始まっていたという記述。高官らの祝祭的な時空間と兵士や一般住民、農村部のみじめな飢餓的状况。一面に広がる森と人けのない未開の土地への進軍と、上がらぬ士氣。退却時の飢えと寒さ、敵の襲来による混乱や多くの死者。極限状況での人間的感情の麻痺。持てる限りの略奪品を携えて退却する様子。一二月初めに大陸軍は辛うじてヴィルナにたどり着くが、ナポレオンは密かにパリへと脱出、残された兵士たちの多くがヴィルナで命を落とした。ヴィルナ撤退時の戦闘においても、指揮官が逃げ敗走が決まると多くの兵士が敵に先んじて自軍の略奪品を奪い合う光景が見られたという。ロシア軍が再度ヴィルナに戻ってきたとき、市に至るまでの街道にも市内にも死体があふれていた。ロシアの将校の残した叙述にもフランスからの解放という「歓喜」だけではなく冷ややかな眼差しが存在した。

第五章「ロシアの策略」は、主としてロシアの作家や芸術家の目を通してロシア帝国の一地方都市となったヴィルナについて語る。ポーランド語エリートと多くのユダヤ人が暮らすヴィルナに対するロシア統治の変遷にも触れている。同市は一八六〇年代の鉄道開通以降ロシアとヨーロッパを結ぶ拠点となり、ヨーロッパへ往来するロシア人たちにとってヨーロッパの玄関口と感じられていた。本章で特に印象的なのは、ともに旧リトアニア大公国の貴族に出自を持つ作家のF・ドストエフスキーと画家のM・ドブ

ジンスキーのこのまちに対する態度の違いである。ドストエフスキ夫妻は一八六七年にドイツへの旅の途中ヴィルナを通過した。自分の出自に対するコンプレックスから逆に反ポーランド的・反ユダヤ的なドストエフスキは、妻の日記によると、ヴィルナに泊まった晩強盗に対する不安に駆られて部屋を内側から家具や荷物で封鎖したのだった。他方ドブジンスキーは一九世紀末の数年間をヴィルナで過ごし、その後もたびたび同市を訪れた。彼はヴィルナのロシア化に違和感を覚える一方、同市でヨーロッパ建築の美に目覚め、西欧滞在後もこのまちへの愛着を捨てることがなかった。ヴィルナの路上で作画中に住民といわば「ふれあう」様子も回想録に記されている。

第六章「ドイツの侵入」は第一次世界大戦中ロシア帝国に侵攻し、ヴィルナを占領したドイツ軍について述べる。中心になるのは、占領軍によって刊行された新聞『ヴィルナ新聞』*Wilnaer Zeitung*に掲載された、芸術批評家P・O・H・フェヒターによる休暇中のドイツ軍兵士向けの街案内「ヴィルナ街歩き」シリーズである。おそらく実際に市内を歩き回ったフェヒターは徐々にヴィルナにドイツ的景観を見出し、記事で同市をドイツ的空間——の境界部分——に位置づけようとした。本シリーズはまちに対する美的感覚を表現しながら、ドイツ軍による占領地の植民地化と「文明化」、すなわちドイツ化政策の一端を担っていた。フェヒターの街歩きには細い路地や神秘的なユダヤ人街、タタールの住む街区も含まれる。彼は衛生状態の悪さや貧困などに対する拒否感を乗り越えてユダヤ人街に入り込み、路地での商いの様子、安息日の礼拝、特に大シナゴグの様子を描いた。それはヴィル

ナに存在するもう一つの世界だった。フェヒターは前線から戻った兵士が故郷の都市とヴィルナを重ね合わせるさまを感傷的に描いたが、筆者によれば多くの兵士はヴィルナに対して物質的なかわりあるいは性的な経験を持っていただけであった。

第一次世界大戦終結後もポーランドとリトアニア、ソ連によって領有が争われたこのまちは、結局新生ポーランド国家の一地方都市となりながらも、リトアニア国家の憲法上の首都であり続けた。第七章「不在のネイション」では、兩大戦間期のこのまちにおいて住民の約半数を占めながらその声がどの国家によっても代弁されなかったユダヤ人に焦点があてられる。主に利用されるのは、一九二四年に雑誌社の依頼でポーランドを訪れた、同化ユダヤ人の両親を持つドイツの医師兼作家A・デーブリンの記述（『ポーランド旅行』）である。ヴィルネのユダヤ人社会は当時ドイツシユ世界を中心であったが、非ユダヤ人のあいだでは反感や軽蔑の対象ともなっていた。デーブリンは、周囲の社会に同化した西方のユダヤ人にはない、ヴィルネのユダヤ人の文化的・政治的活動の活発さ、精神世界や信仰の豊かさに触れ、敬意を抱いた。彼はまた、シオニズムやブント、ヘブライ主義とドイツシユ主義などの近代ユダヤ社会の諸潮流における、信仰と国家・政治というジレンマも指摘した。彼はブントにシンパシーを寄せるとしてシオニズムには懐疑的であった。

最終章「激動のヨーロッパ」ではこれまでの章とはやや趣を変えて、第二次世界大戦の直前から二〇〇〇年代までの同市における死者及びそのコメモレイション（埋葬、墓地）を中心に、過去

や記憶の消去と上書きという歴史的な見せかけの問題が語られる。第二次世界大戦勃発後この都市の帰属はリトアニア、ソ連、ドイツ、再びソ連と、目まぐるしく変わり、多くのユダヤ人人口を抱えたポーランドの都市ヴィルノ／ヴィルネがリトアニア・ソビエト社会主義共和国の首都ヴィリニウスに変わった。ユダヤ人社会の消滅と「本国送還」という名のポーランド人の追放などによって一九三九―四九年の間にこのまちは人口の九割を失い、代わりにリトアニアの他地域あるいはロシア本国から人が移り住んだ。土地に生まれた者が部外者になり、新來の者が地元者になったのであった。本書のタイトルはこのことをも象徴している。戦後、記憶の消去・忘却と地名の変更や街区の再開発、墓地の撤去（あるいはその再建、再埋葬）など都市表面の操作の上に、ソ連時代の社会主義的リトアニアのヴィリニウスや、さらには独立後のヨーロッパの一員たるリトアニアのヴィリニウスが作られた。それでも、異なる民族出自やイデオロギーの者が混在して埋葬されている墓地や、ドイツ軍戦争犯罪者やユダヤ人ジェノサイドに参加した対独協力者、殺人犯などを含むNKVDの犠牲者の記念の問題など、このまちな記憶は常に不協和音を奏でているのである。

以上が本書の要約である。だが本書はエピソードを持たず、その読みは開かれている。また本書で記述される内容自体は多岐にわたり、本書の価値の一つは個々の具体的な記述や一般化の難しい個人の体験、個々人による叙述の違いにあることも言い添えておきたい。

さて、本書は、リトアニア独立後に包括的なヴィリニウスのアイデンティティを作るべきだと主張した、詩人で文学者の丁・ヴ

エンツロヴァのヴィリニウスに関するエッセイに大きな影響を受けている^①。ヴェンツロヴァが提起したこの問題は、都市ヴィリニウスだけでなくリトアニア国家全体の抱える問題でもあり、リトアニア史、ヴィリニウス史研究においても多民族性、多宗教性、多言語性をふまえた歴史叙述が模索されている。その中で出版された本書は、一國の首都を異邦人のまちと名付けること、特に一九四五年以降についてもそう呼ぶことがリトアニア系の読者の間に議論を呼んでいることからもわかるように、大胆な挑戦であり、また同市の歴史の重層性ときときにはその表象の作為性を都市史の枠を超えてヨーロッパの歴史の中に位置付ける有意義な本となっている。

本書を読むとまずは戦争と略奪、疫病の多さに驚く。また、知らぬ土地に足を踏み入れた旅人が残した記述の面白さに引き込まれる。そして現在の都市の外観から失われたものの多さに慄然とする。たとえば、ソ連時代以前のユダヤ人街にあった「ドイツ通り」はソ連式の街区に改造され、「博物館通り」と名付けられた（現在は「ドイツ通り」に戻されている）。プロテスタントやタタール、ユダヤ人など「他者」の墓地は撤去・再開発の対象となり、墓石は建材へと再利用されたという。リトアニア独立後もプロテスタント墓地を除いてこれらの墓地は再建されることはなく、特にユダヤ人墓地跡地は新たな商業区域の一面となった。記念碑や案内板が多い旧ユダヤ人街を除けば、現在のまちな景観からだけではこうした過去はほとんど窺い知れない。それでも第八章を読めば、死者のコメモレイションは過去や記憶の消去と上書きに利用されると同時に、そうした操作に異を唱え、上書きさ

れた下からでもなお過去や記憶を語っていることが理解できる。

このような問題は都市に注目した研究だからこそ扱いうるテーマであろう。継続的に人が住み続け、地域の中心であった都市に視点を絞ることで、国家あるいは地域の歴史からは見えにくい、土地に蓄積された記憶や歴史が明確に浮かび上がるのである。同一の場所についてのまったく異なる経験や記憶が存在するということを本書は見事に示している。

だが、本書はいくつかの問題点を抱えている。

その第一は、このまちについての外部の者による記述の扱い方とその選び方である。本書で利用されている史料は、日記や回想録、手紙、新聞記事、文学作品、報告書など多岐にわたり、それを残した人物もヨーロッパの様々な国から来た聖職者や外交官、軍人、作家、科学者など多様である。このことが本書の大きな魅力になっていないことは疑いがない。ただ、史料のなかには、ナポレオン没落後に書かれたモスクワ遠征に関する回想録など詳細な史料批判が必要なものも少なくない。しかし史料の性格については、書き手や成立の経緯が簡単に述べられてはいるものの突っ込んだ議論や説明がない場合も多い。そのため、これらはそのままこのまちの歴史として扱うのではなく、このまちの表象（の歴史）として扱うべきものだといえる。実際、プロローグからもこうした筆者の姿勢が読み取れ、ほかの研究書や統計的な史料などからまちの歴史を一通り伝えるように構成していることも窺える。だが、それにもかかわらず、先述のような史料の一部がまち自体の歴史を表すものとして本文中で位置づけられており、本書の記述のなかでまちの歴史とまちの表象の歴史が錯綜する感否めな

い。

また、本書で本格的に取り上げられる外部からの訪問者の叙述の中にポーランドあるいは近世のポーランド王国出身者によるものはない。ポーランド王国はリトアニアのカトリック改宗以来王朝連合を形成し、一五六九年以後は連合国家「共和国」を築いていたとはいえ、ポーランド王国出身者とリトアニア大公国出身者は法や慣習の上でも、自意識の上でも異なっていた。さらにポーランド分割以降、西部諸県としてロシア帝国の直接支配をうけたヴィルナを含む地域の住人と、プロイセン領やオーストリア領、そして一九世紀半ばまで一定の自治を認められていたロシア領ポーランド王国の住人のあいだでは、社会的・経済的・文化的な差異はより広がっていった。したがってポーランドの出身者はいわば一番身近な異邦人であり、本書はその記述を欠いているのである。このことはまた、ポーランド語話者にせよ、イディッシュ語話者にせよ、同じ言語を話す異邦人という類型を本書が想定していないことも意味している。

次に、本書は中世から現代までをカバーしたうえで、宗教、地理認識、戦争、コモモレイションと、扱う内容も甚だ広い。だがそれゆえに各章の考察に物足りなさを覚えるのも事実である。たとえば、第二章で扱われた、言語的・宗教的に多様な「共和国」の貴族を統合し、その特権を歴史的に正当化する役割を果たしたサルマチア起源説に対しては、リトアニア貴族のポーランド貴族に対する差異や優位を示すものとしてのローマ起源説が対置されることが多い。本書でもリトアニア貴族のローマ起源については触れられているものの、ローマ起源説は系譜への関心の一つとし

てサルマチズムやバロック的思考の一部に包摂されているかのようである。サルマチズムとの対立的な側面を含めてより丁寧な議論が望まれる。また、本書の広範な関心の裏で、主要なトピックへの力点の置き方——ユダヤ人に対するジェノサイドを含む第二次世界大戦についての記述は、一八一二年のナポレオンによるモスクワ遠征ほど具体的ではない——に説明が必要と思われる場合もある。

最後に技術的な問題が挙げられる。歴史地理学の視点から描かれた本書は地図への言及が多く、図版を豊富に収録している。だが本文中で重要な扱いを受けている地図のすべてが本書に収録されているわけではないのが惜しまれる。さらに都市内や郊外の地名がたびたび登場し、重要な役割を果たしているにもかかわらず、地形や通りの名がわかるようなこのまちの地図は限られており、土地に不案内な読者には不親切である。

その他にも些細な間違いはある。それでもなお、ヨーロッパの辺境に位置するこのまちについての外部の者による叙述がその時々ヨーロッパ像を映す鏡ともなっていることを示し、そのうえでこのまちの包括的な歴史のモデルを示した本書には、一読の価値があろう。

① Tomas Venclova, *Vilnius: eine Stadt in Europa*, Frankfurt am Main, 2006. フリドマインズが引用しているヴェンツピロソフの主張 44 以下。Id., *Vilnius: City Guide*, Vilnius, 2001, p. 9.

② Victor H. Winston, "Review of: Laimonas Briedis, *Vilnius: City of Strangers*", *Eurasian Geography and Economics* 2010, 51, No. 3, p. 404.

(Balos Iankos & CEU Press, Vilnius, 2009, 296pp)
(日本学術振興会特別研究員)